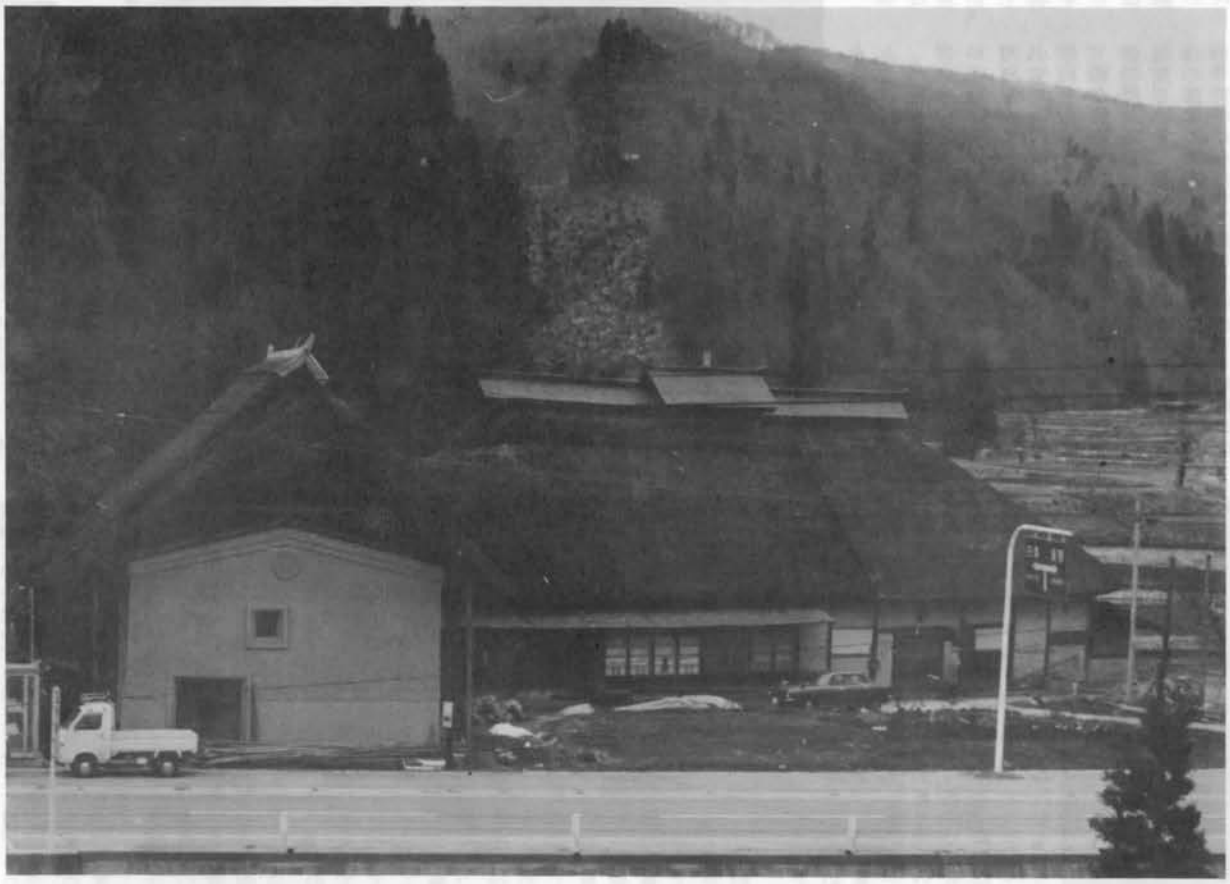
① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

# 山と博物館

第25巻 第4号　1980年 4月25日　大町山岳博物館



茅葺屋根の民家（重要民俗資料）美麻村　中村武本氏宅

## 長野県北安曇郡美麻村青具　中村武本氏住宅

狭い山合の平地に、小高い雑木林を背にして建てられている。この住宅の屋根は、峯のぐしの中央に煙出しがあり、その中央の御幣の飾りは、茅葺き屋根の分厚さと、そのなだらかな曲線と、更に内部の屋根裏の太く高く支える木組・梁・柱と相待って宏壮で豪華さを与える家作りである。

入口の戸をくぐると、土のたゝきのどぢがあり、その奥には四・八尺×四・六尺の囲炉裏・火棚・窯・水屋を持つお勝手がある。どぢの左方の部屋には、漬物部屋と道具置場がある。その奥には、九坪の大きな馬屋があった。どぢと勝手の境には、七・五寸×九・五寸の角の面取の大柱で家の半分を支える中心柱がある。

右手半分の四十二坪には、四・三尺×四・二尺の炉を持つ二二畳の茶の間・七畳敷の取次の間、寝室・後世の改造に成る小座敷等とゆりかを通して入る、一二畳敷の仲の間と床の間と押入を備えている一〇畳の奥座敷がある。炬燵は茶の間・取次・小座敷・仲の間の四ケ所で、二個の炉で寒い冬に暖を取る古いこの地の様式を示している。

家の中で特に目を引くものは、古さを示す仏壇・神棚とえびす棚の前の巻藁である。

床高は一・七尺であり、古い家程柱数が多いといわれているが、この家も多い、殊に馬屋の外周の柱は三尺おきである。柱の殆んどは、四・二寸×四・三寸の角で三分の面取りで、手斧仕上である。

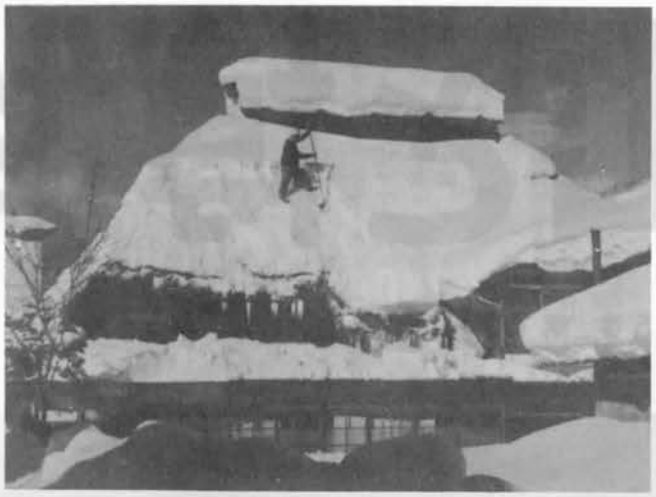
周家の天明の頃書かれたと思われる年代記に依ると。「元禄十一戊寅（一六九八）、此年此家を立った、春三月十五日に立始、十七日晩嶺上いたし、大工は千見村板郷さなずら九平と申仁立申候…」とある。

今から二八二年前の元禄一一年の新築で、小座敷・奥座敷の一部と、その外周の廊下、ゆりかの小部分が増改築されたのみで、改造の少い貴重な家である。（北安誌編纂委員会と藤島亥治郎博士の昭和三一年八月の調査資料による）

青木　治

# 雪国の民具（3）

長沢　武



コスキ（コッパ）による屋根雪落し

## 四、除雪用具

豪雪地帯と呼ばれる地方では、雪は一夜にして一メートル余、全期間を通じては十数メートルにも達し、生活に大きな支障を及ぼす。しかし、これを取り除く用具は全国的に見て誠に乏しく、一般にコスキと呼ばれるヘラ状の木製具が唯一の除雪用具であった。コスキは木鋤と書き、コシキとなまる場合もある。新潟県の一部から富山県、福井県にかけてはバンバ、ユキベラ、ゴイスキ、岐阜県の飛騨地方でもバンバ、又はコスケ、コスクイといい、新潟県から長野県の下水内地方ではコスキ、北安曇郡ではテンズク、小谷でコッパ、東北地方ではナギ、ナギャ、ナゲベラなどと呼んだ。

コスギは主として現在のスコップと同じ用をなすもので、従って軽くて強靭な材質である上、水分を吸収しにくく、雪が付かないものが良いわけで、これに適した材として、一般にはイタヤカエデが用いられたが、新潟県方面ではブナ材が主として用いられた。『北越雪譜』にも、「掘らざれば家の用路をふさぎ、人家を埋めて人の出べき処もなく、力強き家も幾万斤の雪の重量におしくだかれんをおそるるゆえ、家として雪を掘らざるはなし、掘るには木にて作りたる鋤を用ふ。里言にこすきといふ。ぶなという木をもって作る。木質軽強にして折る事なく、且つ軽し、形は鋤に似て刀広し、雪中第一の用具なれば、山中の人これを作りて里に売。家毎に貯へざるはなし」とある。

型としては、鋤部分の巾の大（三〇センチ）小（一五センチ）と、柄の長い物（三メートル）短い物（九〇センチ）との組み合せで、四種類があり、一般に大きい物には「才」、小型の物には「コ」の字を頭につけて呼び、それぞれ使用目的によって使い分けている。

柄が長く、ヘラも大きなものは、草葺屋根の屋根雪落し用で、草葺屋根は勾配がきつく危険なので、遠くから長柄の巾広のもので突いて落すのであるが、板葺屋根は勾配がゆるく、突いただけでは落ちないので、短柄の巾広のものを使い、その上に乗せて投げるのである。これは家の入口などの除雪にももっぱら使われた。ヘラの巾の狭い舟のカイ状の物はコナゲ（小長柄）といわれ、もっぱら雪山の仕事の時や猟に利用された。

## 五、防雪、防寒具

### (1) 被り物

**角巻**　冬の外出用被り物で、今の毛布の類で、女子用のものには裾に房状に飾り糸で縁取ったものもあった。明治、大正、そして昭和二十年代迄老若男女を問わず広く流行した。主として東北から会津盆地、新潟、長野県下などで用いられ、身丈に応じ対角線に沿って二つに折り、対角線の頂点の手前を手で持ち頭からすっぽり被り、身体をくるみ、胸の計で合せ、吹雪の時はさらに口の位置近くで合せ目だけ出して歩き、暖かい日はこれを肩迄下げて歩いた。北安曇地方ではケット、秋田県鹿角郡ではマワシトビと呼び、簡単な被り物であるが戦後アノラックが流行するまでの一般的な被り物として、安くて軽く、しかも機に臨み対応に素早い変化がとれる合理的な防雪兼防寒用具であった。

**簑帽子**　現在は雪国の観光ポスターなどに見られる程度となってしまったが、雪国の風物詩的な服装で、昭和三〇年頃までは、東北から新潟県さらに長野県では飯山地方の一部にまでみられた。角巻の原型的被り物といった感じの物で、藁製もあるが一般的には菅又は藺（い）草の一種を用いて作る。新潟県吉川町の山間部で作るものは、タツノケと呼ぶ細い草で、夏採集して干し、これをカラムシの皮を黒く染めて糸としたもので一本一本編んで作る。簑は肩までのものであるが、こちらは頭から被るので頭部は屋根型に編み合せるわけで、この部分の編み方は地方により変化がある。秋田県仙北郡では、帽子の部分は黒麻糸で編み、頭の周りを川藻で装飾した物があり、岩手県産の物は後頭部を三角にして頂点に釣り手がついている。又長野県下で水内地方の一部では、竹の皮で作る物もあるという。

簑帽子は名前の如く、簑に帽子部分を付けた被り物であるが、ゴザを二つ折りにし、頭部を縫い合せた被り物が原型であろう。富山県での子供達の一般的な雨具はこれで、ゴザボウシ（上市）、ゴザブシ（氷見・砺波）などと呼ばれ、婦人達も近くの外出にはよく使ったものである。

簑帽子は頭から被って膝の辺まであるが、これより丈が短く、作り方の似ているものにスゲボウシ（菅帽子）、カブト（兜）がある。被ったり脱いだりに簡単で、袖がついており前を紐で縛れるようになっている。又県下には、下水内郡栄村のズッコ、飯山市の一部でショウタツと呼ぶ兜に似た被り物がある。

**ボッチ**　戦争中の防空頭布を思い出したらよい。女児用の冬の被り物で、一般に表は縞木綿、裏は紅の木綿地で作り、中には綿をたっぷり入れた被り物で、東北地方を中心に用いられた。ボッチは帽子の東北地方の訛である。また東北地方でマタギボッチと呼ばれるマタギが猟の時被る被り物は、兜型頭布で、馬の尻毛を白の木綿糸で美しく編んだ物である。馬の尻毛は雪が付かなく凍らず、軽くて丈夫である。またマタギはモンパと呼ぶネルの厚地の長三角型の頭布を頭から首まで包む

コスキ（コッパ）
山岳博物館資料

ように被る。これは吹雪の時には欠かせない被り物であった。

**ウマノツラ**　菅草や蒿ミゴを編んだ帽子状の被り物で、山形県仙北、平鹿地方の呼び名、南秋田地方ではボアサキという。脛当の脛巾（はばき）状に細かく編み、穂先の方は編まずに残しておく。正に顔の雪囲いといった感じの被り物で、防雪と同時に直射日光を避ける日除けの役目をしている。一般に男女が山仕事の時被る物であるが、融雪期の強い日射しを避ける為に特に女性が愛用した。ヌマタギもよく使用した被り物で、秋田、岩手の奥羽山系のマタギは蒿ミゴを編んだ物を使用、これをトラボウとかダオボッチといったが、トラボウとは、この地方でトノサマバッタのことを呼ぶ方言で、形がそれに似ているからの名前らしい。阿仁マタギが被ぶアマブタもこれによく似ている物で桧笠状に頂上が高くなるよう円錐状に編んであるのが特長である。

**雪目防け**　一面の銀世界、抜けるような空の青さ。このような快晴の日には雪目といって目をやられる人が多い。夜になると目がしくしく痛み、目の内がゴロゴロし涙がぽろぽろ出る急性結膜炎である。これを避けるために昔の人はいろいろと工夫をこらした。ウマノツラも帽子のひさし状の部分を持つ被り物であるが、一般には菅笠を被り直射日光を避ける。北安曇地方では雪目を避けるために菅笠の縁に赤布を下げたり、馬の尻毛で編んだ網を下げた物である。これは丁度貴婦人が正装の時顔に被る黒いネットによく似ていた。

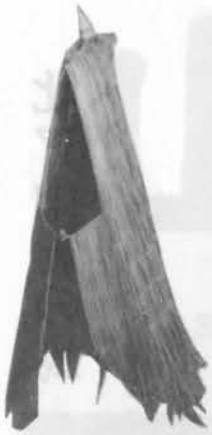
**(2)、衣類**

**雪袴**　モンペが一般に普及したのは太平洋戦争中からである。行動性があり暖かで裾じまいが良いから戦争が終ってもそのまま定着してしまった。それ以前の暖地の女性の仕事着は腰巻きの蹴出しであった。しかし山国や雪国では古くからモンペの原型である山袴や雪袴をはいていた。富山県五箇山地方ではこれをタッツケ、カルサンといった。立山山麓でハカマと呼ぶ物は、膝下迄の短い物で、腰の部分に余裕があり、上衣の裾を入れたり、雪の中を歩く時はそこへスペを入れて暖かくしたという。新潟県から長野県北部にかけては、ユキコギ、ヨツコギ、エツコギ、イツコギなどと呼ばれ、普通木綿縞製であったが、特に山仕事には雪が付かないために麻布製のヌノヨッコギが用いられた。南安曇郡ではこれをユキマタギと呼んだ物もある。

新潟県から東北へかけて、マタギと呼ぶ猟師が活躍した地方では、冬の猟にはく雪袴はマタギバカマともいい、やはり麻布製の膝下までの物で、膝の所で紐で縛るようになっているか、膝下はスネなりに細くし、裏地には防寒防雪を考えムササビの腹皮を縫いつけた。

**綿入半纏（はんてん）**　衿の折り返しや前紐もなく、袖も筒袖で綿をたっぷり入れた物で、着物の上に普通着る物で、昔から広く雪国で一般に用いられている物である。子供を負った上から着るように、大振りに仕立て、袖も広く作ったものはネンネコ半纏といわれ、柄も美しいものが使われた。

**亀の甲・綿子**　綿や真綿を沢山入れ、簑状に首紐と胸紐を付けた防寒衣をカメノコといい、真綿だけで作り、形も亀の甲型に円く仕上げ、紫色などに染めて首紐、胸紐を付けたものはワタコといい、主として老人が防寒用に着た。



ミノボウシ
山岳博物館資料

**(3)、暖房具**

**囲炉裏**　囲炉裏は地炉ともいい、煮炊き、乾燥、骨組みの保存のためを兼ねた暖房施設である。雪国では冬季間燃やす薪はハルキといい、その年の早春雪の中で伐り、長さ三尺五寸に玉伐って大割りをし、山に積んでおいた。ハハキ一間（巾六尺×高さ六尺に積んだもの）とボヤ（小枝を集め束ねたもの）五〇束が一冬の焚物の必要量の標準であったが、これを秋の収穫が終ってから、山から家へ集めるのが、冬の準備の仕事の一つであった。山から運んできた物は家の小屋組（タカ）へ土間から梯子を使って上げるのであるが、雪囲いを済ませ、この焚物寄せが終るまでは気が気でなく、これが済むと誰しもホッとするのであった。何か用事でもあって他人より冬ごもりの準備が五日も遅れていると、いつどさっと大雪が降り根雪になるか解らなく、薪も集めない中に大雪に見舞われると、冬中焚く焚物に不自由することになり、このことは雪国の者にとって一番つらく、又恐しいことであった。タカに上げ終えた薪は、冬中必要に応じここからロープで小出しに下して囲炉裏で焚くのである。

イロリ、美麻村　中村武本氏宅

囲炉裏は普通四尺（一・二メートル）正方形を標準とし、縁（ユルブチ）はナシ、ウメ、ヨグソミネバリ材が一番良いとされた。囲炉裏の火は、一日二十四時間たやすことなく燃やし続けられ、夜寝る時はその前に火止めといって大きな節があって割れないような大木を入れ、灰をかけて朝まで火種が残るようにした。

囲炉裏の上には大きな火棚がどこの家にも取り付けられており、濡れた雪沓など乾燥させる物は何でもこの上に載せて乾かした。こうして四六時中焚き続ける囲炉裏の火の煙は屋根裏に昇り、煙の成分のタール質が、小屋組みの縄や小屋材にしみ込んで、これらを丈夫にするのであった。昔から「人の住まなくなった家はもろくなるから、空家にするようなら金を取らなくても他人に借せろ」といわれている。

**炬燵**　炬燵は囲炉裏と共に、雪国の村での唯一の暖房設備であった。家族が日常使用するものは掘り炬燵といい、地面から床面まで石と粘土で築き上げて作り、火持ちの良いようにした。座敷や二階に作るものは切り炬燵といい、床板を火びつの大きさに切り、その穴に火びつを据え、やぐらを乗せるのであるが、この方が火持ちが悪いとされている。

炬燵布団の下には下掛け、上には上掛けをかける。どちらも自家製の物が使われ、下掛けは古い布を幾枚も重ねて糸でさした物、また上掛けはボロ織りといって、古いボロを細かく裂いた物を、丹念にハタ織り機で織った物で色の配色を考え美しく仕上げた民芸品であった。

（終）

（白馬村神城佐野）

# 北ア山麓の鳥

## ―夏鳥の渡来に注目しよう―

三石　紘

桜前線の北上と同じように、鳥たちの世界にも冬から春、さらに初夏にかけて、南から北にむかっての移動がみられます。

北アルプスの山麓でも、深い雪がとけはじめた頃から、桜の花が終って、山麓が青葉で活気づく頃までの間、夏鳥と呼ばれる鳥たちが、南の国々から続々ともどってきて、美しいさえずりを聞かせてくれるようになります。

ウグイスやミソサザイのように、積雪が多い時期には里に下っていた漂鳥も、もちろんもどります。ですから、ちょうどコブシが開き、ミズバショウの咲く、はなやいだ山麓に、鳥たちのコーラスがいろどりを添えるわけです。

こんな季節に山麓でよく出逢う鳥、あるいは、注目してほしい鳥について紹介しましょう。

**オオルリ**　新芽がわずかに目立つようになったカラマツ林の、山道近くの樹頂で、全身ルリ色の金属光沢に包まれたきれいな小鳥が、白い胸を張ってさえずっていたら、それはオオルリの雄です。「ピールリ、ピーリ、ポピーリ、ピーピル、ポピーリ、ピース、ピース」とゆっくり鳴き、時々「ジャッ、ジャッ」と合いの手が入ります。四月の末から五月の初めにかけて渡ってきます。

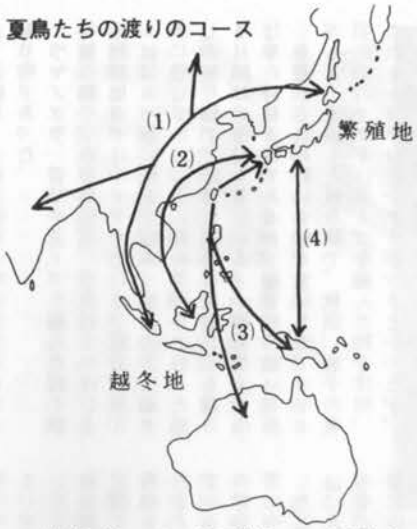
**サンコウチョウ**　一昨年の六月二十九日、信濃教育会山岳講座の下見のため針ノ木雪渓に行った時、早朝四時頃に博物館のすぐ裏の沢のスギ林で、じっくりと姿とさえずりに接しました。オオルリとは対照的で、うっそうと繁る林に住みます。こんな林はどしどし伐採される現状ですから、個体数の少なくなりつつある種です。「月、日、星、ポイポイポイ」と聞えます。尾が長くて、目のまわりがブルーで、まるで天国からやって来たような鳥です。北ア山麓には、まだまだスギ林が多いので、注意して観察してみましょう。

**コムクドリ**　一年中田舎に住みついているムクドリとちがって、コムクドリは四月中旬から下旬にかけて、南の国からもどってきて、にぎやかにさえずります。樹洞の多くありそうな林や、屋根がわらの多い村落、それに古い土蔵などの残っている街並などでみられます。ムクドリよりもっと目立つ色です。多くの場合、前年と同じ巣穴を利用します。

**オオヨシキリとコヨシキリ**　水辺のヨシ原で、元気に鳴いているし、茎に止まって口を大きく開いている姿は、それはよく目立ちます。両種とも、夏鳥のうちでは渡って来るのは遅い方です。オオヨシキリの棲むヨシ原も、コヨシキリの棲むススキ原も、他の草木よりも芽吹きが遅い（夏期性）ほうであることに関連があるようです。両種が混棲しているばあいはコヨシキリの方が、草むらのヘリにいるので注意して観察して下さい。

（長野県山岳総合センター専門主事）

夏鳥たちの渡りのコース




(1)インド・マレーシア半島・スマトラから
(2)マレーシア半島・ボルネオ島から
(3)ニューギニア・オーストラリアから
（本文の5種は、このコース）
(4)ニューギニア・オーストラリアから

渡来直後、倉の屋根でさえずるコムクドリ　撮影　三石紘

## 友の会だより

・新会員の募集
ご希望の方は事務局（大町山岳博物館内）へ資料をご請求下さい。

・居谷里湿原自然観察会
4月29日、5月5日、両日とも午前9時までに山岳博物館前庭に集合、テキストあり参加費無料、昼食持参のこと。

・小鳥の声を聞く会
5月10～11日、1泊2日、山岳総合センターに宿泊、申込は5月9日までに事務局へ参加費　大人二〇〇〇円、小・中校生一五〇〇円、朝のみ参加五〇〇円、テキストあり、夕・朝2食付。

・山菜会
5月25日　鹿島大谷原まで自然観察会をかねて行う。大谷原で飯ごうすいさん、山菜味噌汁。申込は5月24日までに事務局へ。友の会々員は無料。

## 博物館だより

・人事異動
4月1日付で宮田寿男主事が市民課へ転出
宮野典夫学芸員が着任しました。

・ライチョウ寄付金
一二〇〇円　横浜市港南区芹ガ谷2―25―7　田中満雄殿
五〇〇〇円　東京都練馬区貫井3―45―8　岡村正子殿
五〇〇〇円　東京都練馬区南大泉五四〇　藤田功殿

山と博物館　第25巻　第4号　一九八〇年　四月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）